

## 温泉観光地大鰐の地理学的研究

坂 中 正 人

I は じ め に

我が国の観光事業においてその中心はながく温泉地であった。しかし、高度経済成長期以降、社会構造が急変する中で温泉地離れがすすみ、さらに観光形態も団体中心から小グループへ細分化し観光の志向性はドライブ・スポーツなど多様化した。このような背景の中で温泉地は質的な転換にせまれ、多くの温泉地が新たなニーズに答えるべく脱皮をはかっている。特に、観光客の多様で強いレクリエーション志向に答えるものとして、レクリエーション基地の開発が全国ですすめられた。

本論文では、このような温泉地のひとつである青森県大鰐町の現状とその開発過程とをあわせてとらえ、大鰐町の今後について考察してみたい。

## Ⅱ 大鰐温泉の概観

### (1) 地域の概観と交通

大鰐町は、津軽地方の南端に位置し、平地は平川の流域に多少みられる程度で山がちである。町の中心は大鰐・蔵館地区にある。

大鰐町は東北自動車道と国道7号線が走り、さらにJR奥羽本線、及び弘前とを結ぶ弘南鉄道大鰐線が通っており交通の便はひじょうに良い。

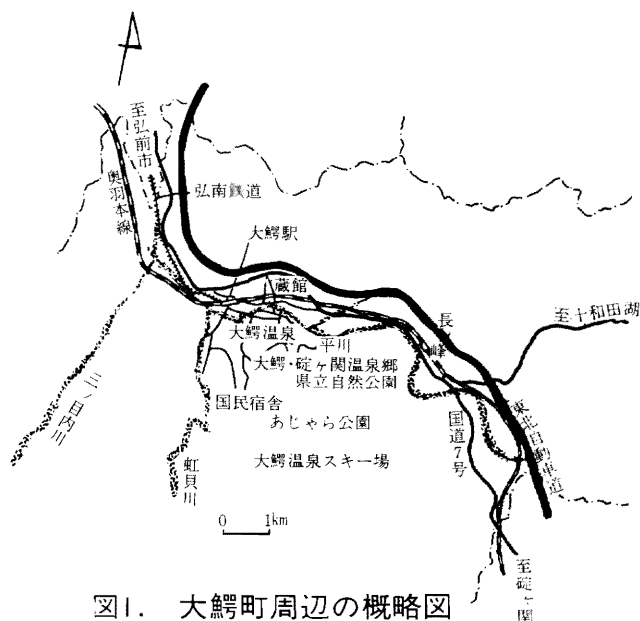


図1. 大鰐町周辺の概略図

## (2) 大鰐温泉の歴史と観光資源

大鰐温泉は、1190年頃円智上人により発見されたといわれ江戸時代に津軽藩主が代々入湯に訪れ、そのため旅館が数軒できたのを起源とする。明治時代に入り旅館もさらに増え、弘前との道路と鉄道の開通した明治時代末から開発がすすみ、大正時代から昭和の初めにかけてたいへんな活況を呈した。戦後、いち早くスキー場の開発をさらにすすめ、浅虫と並ぶ青森の2大温泉地として広く知られたが、昭和30年代から急速に客足がおちてきた。

昭和53年にあじら公園拡張整備計画をまとめ、レジャー基地の建設を開始する(表1)。大鰐の観光資源は温泉とスキー場を中心としたあじら公園がメインであり、他にめばしいものはない。

表1. あじら公園施設の経過概要

開 設 年	事 業 内 容
昭 和 29	第1リフト スキー場管理運営開始
37	第2リフト
40	第3リフト
46	おおわに山荘
49	キャンプ場
52	ラグビー場(2面) わんぱく広場
56	第4リフト
57	第2スキー場(ナイター照明付) スーパースライダー
58	ゴルフ練習場、大鰐スタジアム(野球場)
59	テニスコート(一部)、やんちゃ広場
60	テニスコート(8面) ナイター照明
	クロスカントリーコース 第6ペアリフト

(大鰐町開発公社資料より)

## (3) 宿泊施設について

大鰐温泉は昭和61年現在旅館17軒、保養所(国民宿舎を含む)4軒、民宿8軒(ロッジ・ヒュッテ各1軒を含む)、客舎9軒がある。スキー場内に立地する6軒(国民宿舎を含む)以外はすべて大鰐・蔵館地区にある。宿泊施設の特徴として小規模のものが多くことだ(表2)。これは家庭内労働か1名程度の従業員でまかなえる収容数30人程度の所が多いためである。そして、副業として営んでいる所が多い。40名を超えると専業のみになる。

満員になる時は限られており小規模の所は少ない労働力でも充分やっていけるようだ。多忙時には、規模に応じて臨時雇用している。

表2. 7年間の観光施設の推移

業種 \ 年度	昭和54	昭和60
土 産 品 店	1	1
ス ナ ッ ク	15	28
喫 茶 店	2	3
小 料 理 店	4	6
寿 司 屋	5	6
パ チ ン コ 店	1	1
劇 場	0	1
食 堂	8	6
浴 場	5	6

(大鰐町昭和54・60年住宅地図より筆者が作成)

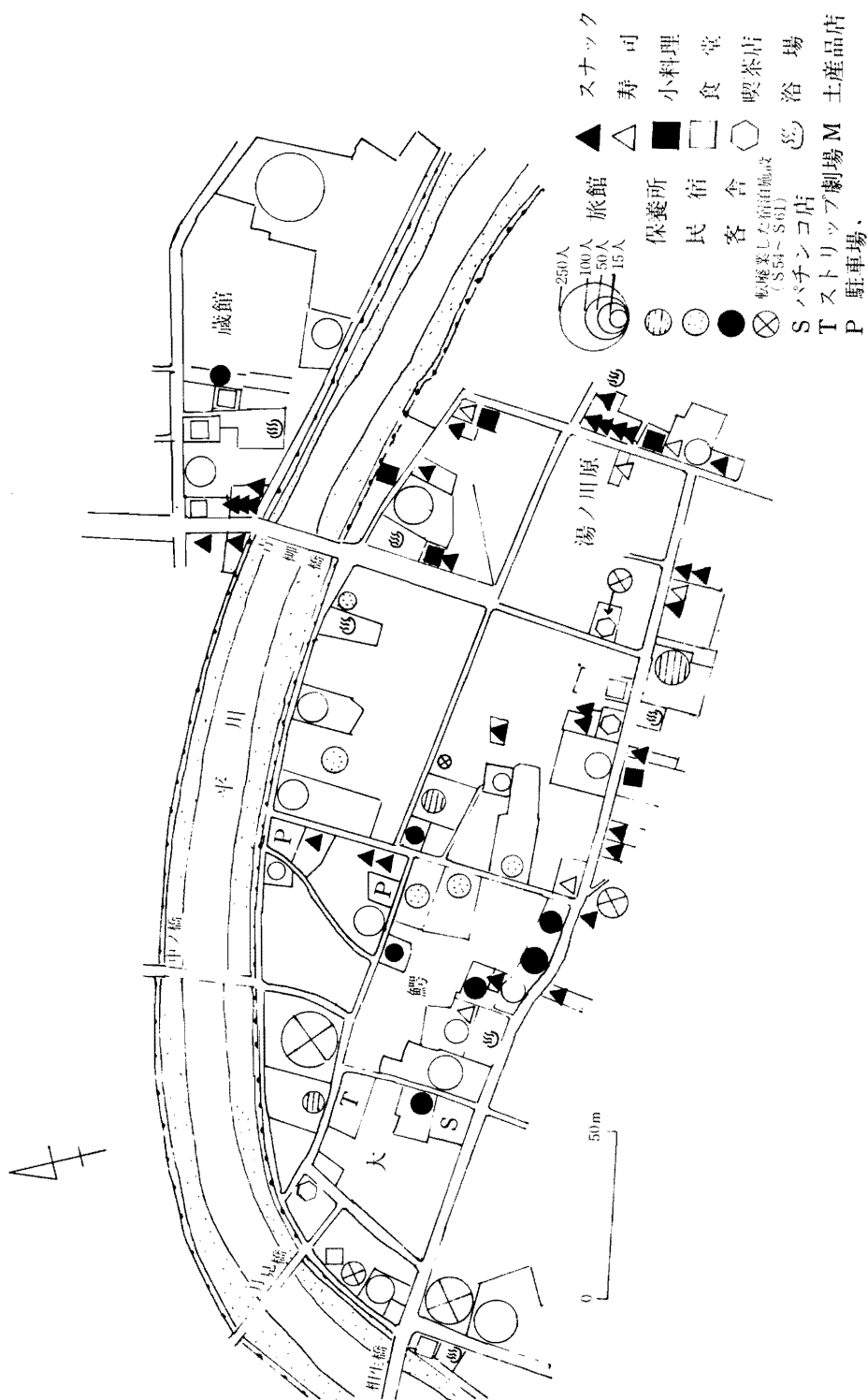
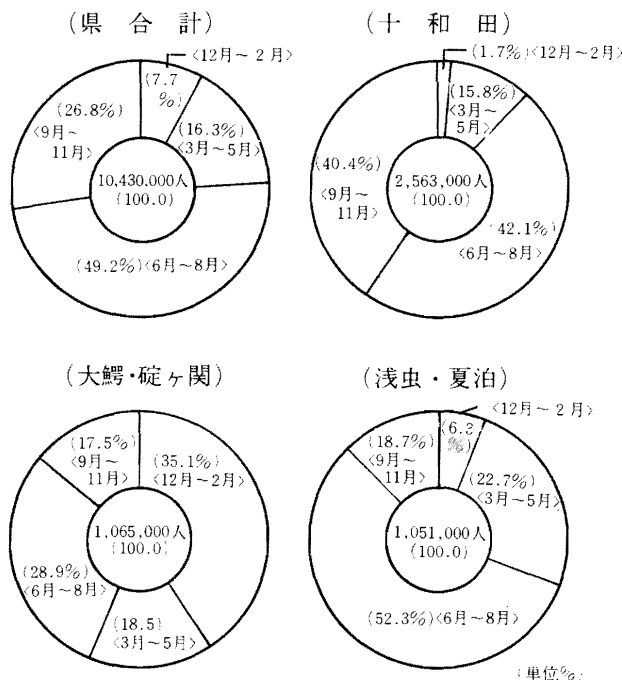
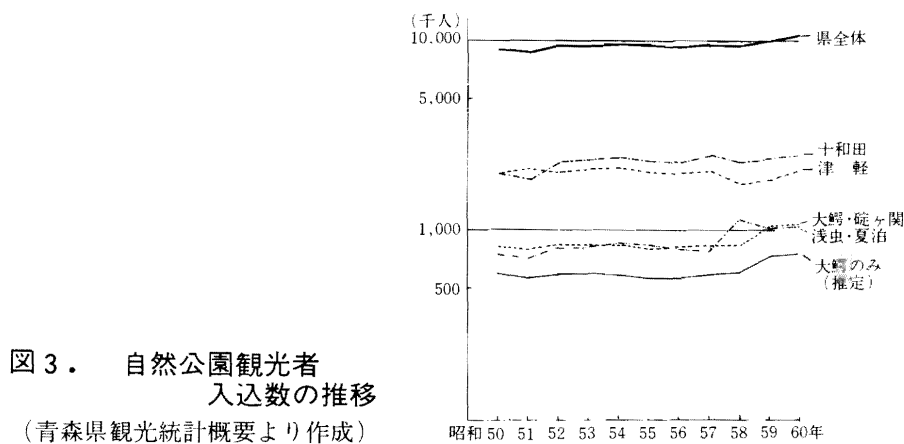


図2. 温泉観光集落における観光関連施設の分布(筆者の調査による) 昭和61年現在

### Ⅲ 大鰐温泉の現状

#### (1) 近年の入込客の動向

青森県の観光客の入込数は昭和51年から60年の9年間で15.3%の増加である。今後もやや増加していくのではないかと予想される。県内の各公園(注1)ごとにみると十和田、浅虫・夏泊、大鰐・碓ヶ関の増加が顕著である(図3)。大鰐・碓ヶ関の入込客の増加は大鰐温泉スキー場の利用客が最近9年間で15万人も増加したことが大きな要因である。入込客の増加は、あじゅら公園の各施設によるものである。(注2)



大鰐・碓ヶ関（注3）の入込客の季節性と他を較べると、大鰐はスキー場の入込客が12～2月にあるために冬季が中心である。通常、夏季中心が一般的なのに対し、大鰐は夏季があまり多くない。これは、大鰐が入込中心の観光地であり、夏季観光の充実があじら公園整備の主目的であったことをふまえ、さらに必要であると考ええる。

## （2）近年の大鰐温泉の動向

大鰐温泉の昭和50年～60年の10年間の宿泊客と日帰り客の合計数は137,249人から105,324人へと大幅に減少している。宿泊客の減少は以前から続いており、このため最近7年間で6軒の宿泊施設が転廃業している。また、アンケートでほとんどの宿泊施設が宿泊客の減少に悩んでいることがわかった。

各宿泊施設ごとにみると、国民宿舎の宿泊客の増加、旅館・保養所の減少が顕著である。宿泊客の減少の原因は、温泉志向の客の減少が最大要因であろう。さらに、従来宿泊施設の少なかった弘前市に大規模なビジネスホテルが増えた事、近隣の黒石や碓ヶ関などに低料金で新しい温泉が多くなったこと、大鰐温泉に魅力のある施設が少ないことなどが考えられる。

また、少ない宿泊客を多くの宿泊施設で奪いあうようになっており、さらに上位6軒でかなりの宿泊客のシェアをもつこととあわせ宿泊施設間の宿泊客数の格差はかなりある。

これは、専門と副業の宿泊施設の間で広がっている一方で、専門の旅館の中でも両極化が

進んでいる。上位6軒の旅館で、旅館に宿泊する客の7割ものシェアをもつ。この結果、今後、副業的な宿泊施設や下位の旅館の中で転廃業が進むのではないか。

## （3）宿泊客の特性と所見

大鰐の宿泊客の季節性であるが、入込客のそれと異なり宿泊客は年間で同じくらいの5つのピークをもつ。1月（スキー）、5月（弘前城・桜祭）、8月（ねぶた祭）、10月（十和田湖・紅葉）、12月（忘年会）である。7年間、この5つのピークは毎年同じである。

それぞれについてふれていくと、1月は正月の休みを利用するスキーの宿泊客が多い。しかし、入込客がスキーで年間32万人もいるのにくらべひじょうに少ないといえる。5月は、弘前城の桜祭、8月は、弘前市のねぶた祭で弘前市内の宿泊施設だけでは収容しきれないこともあり、近接した大鰐へ宿泊客が流れ、祭期間中はどこも満員となる。10月は、同様に十和田湖の紅葉見物のため十和

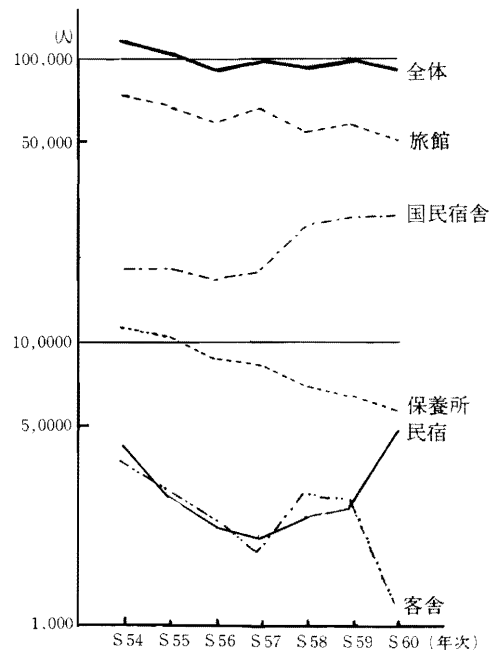


図5. 大鰐町の宿泊施設別宿泊者数の推移  
（大鰐町観光企業課資料より作成）

田湖ではどこでも満員となることと、大鰐の地理的有利さから大鰐への宿泊客が増加する。12月は、近隣の市町村から多くの忘年会客を集める。これは、地理的条件や交通条件の良さに負う所が大きい。このように、大鰐はスキー場以外には温泉しか宿泊客を誘致できる観光資源をもたない宿泊拠点的な温泉地といえる。

次に、大鰐の観光客の誘致圏を明らかにする(図7)と宿泊客の5割近くは、県内からの客であり東北地方をあわせると7割にもなる。大鰐は県内を中心とするローカルな観光地といえよう。

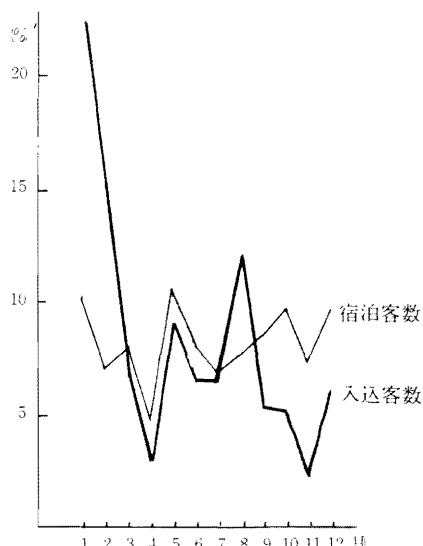


図6. 昭和60年の大鰐町における宿泊客・入込客の月別推移  
(大鰐町観光企業課資料より作成)

弘前市をのぞく 青森県内	32 %	東北地方	26 %	弘前市	15 %	関東	8 %	北海道	6 %	東京	6 %	その他	
-----------------	------	------	------	-----	------	----	-----	-----	-----	----	-----	-----	--

図7. 昭和60年の大鰐町における宿泊客の出発地別割合

(大鰐町観光企業課資料より)

昭和61年に全線が開通した東北自動車道はこの狭い誘致圏を拡大すると期待される。アンケートではより広範囲から来客があったと答えた者が18軒中8軒あった。

津軽・十和田の観光客は今後も増加すると予想され、いかにこの広域観光ルートの中で観光客、特に宿泊客を誘致できるかが大きな課題といえよう。これまでは、地理的・交通的条件や過去の名声に依存してきたため、温泉地としての特色づけができなかった。今後は、この地方の独特の風土をいかし個性のある温泉情緒のある温泉たるべきであろう。

#### (4) 温泉観光集落の特性

筆者は、大鰐温泉において特に宿泊施設が集中している大鰐・蔵館の一部を独自に温泉観光集落(図2)とした。この集落の特徴としては、俗化が進み、住宅・商店などが混在していること。道路も狭く、曲がりくねり車で入りにくい、駐車場もほとんどないことなどがある。さらに、温泉らしさのない集落であることが問題といえる。周囲を平川に囲まれ自然に恵まれており活用を図るべきであろう。あと温泉地であると感じさせる施設・町並が望まれる。

### Ⅳ 大鰐温泉スキー場の開発過程と現況

#### (1) 開発過程

地元の有志により、大正12年に県内初のスロープがあじやら山につくられ、大正13年には「全日本スキー大会」を開催するためにコースを整備したのが開発のはじめである。その後、昭和3年に

「第1回インカレスキー選手権」を開催するまでになり、以後、戦前～戦後20年代にわたり全国クラスの競技場として広く知られた。現在の規模になったのは比較的に近年のことである(表1)。総面積260ha, リフト総延長距離4,064m, 滑走可能期間平均105日, 年間利用客32万人, コースの難易度は上中級者向きであり, 宿泊施設はスキー場付近に国民宿舎(200人収容)民宿4軒, ペンション1軒がある。

## (2) 現 況

大鰐温泉スキー場は弘前市から車で30分という近距離にあるため日帰り客が圧倒的に多い。山形県の天元台スキー場と条件は異なるが比較すると天元台は昭和60年で入込客が16万人で宿泊客が6万人であるのに対して、大鰐は入込客が32万人で宿泊客が1万人にすぎない。大鰐温泉スキー場は、県内の利用客を中心とする、狭い範囲の全国規模からみるとローカルなスキー場であるといえよう。高速交通体系の整備が進む中で、近年、岩手県の安比スキー場と競合するようになってきた。安比スキー場はコースも広く、よく整備され施設もモダンで大鰐とではスキー場のみでくらべるとかなり差がある。これに対して、大鰐は地理的に津軽や大館などから集客しやすいこの付近で最も大規模なスキー場であるといえる。全国的スキー場である安比にいかにも影響を受けないようにしていくかが課題であろう。それには、スキー場の整備・充実はもちろんのこと、さらに温泉を利用した施設がスキー場付近にでき、アフタースキーもゆっくりくつろげるような施設があればと思う。最後に、東北自動車道の影響で大鰐温泉スキー場では、大館方面の来客が多くなったという声が聴かれる。誘致圏を広げる上で参考になると考える。

## V ま と め

本論文では、大鰐温泉を事例として新たな温泉観光地の存立形態を考察した。その結果、次のことが明らかとなった。

- (1)大鰐の入込客は、大鰐温泉スキー場を中心としたあじら公園の入込客が6割を占める。
- (2)大鰐温泉における宿泊客の減少はいぜん続いており、入込客の増加が宿泊客の増加へとむすびついていない。
- (3)宿泊施設は、最近7年間で6軒減少し、なお減少する傾向にある。また、宿泊施設間の両極化が進んでいる。
- (4)宿泊客は、1月・5月・8月・10月・12月にやや多く、出発地は県内が5割近くにもなり、誘致圏は狭い。
- (5)温泉観光集落は俗化し、住宅、商店などが混在し温泉情緒に欠ける。
- (6)大鰐温泉スキー場は全国的にはローカルな津軽地方を中心とした日帰り型スキー場である。

注1 県で区分した自然公園で11ヶ所ある。

注2 大鰐は昭和60年で入込客が80万人、内わけはスキー場32万人、あじら公園のスキー

場以外の施設で 12 万人，温泉で 10 万人，行・催事で 10 万人となっている。

注 3 大鰐と碓ヶ関は県では合計して数値をだしている。入込客はふつう，8：2 の比率と考えられる。

本論文を草するに当たり御指導を賜った水野裕，後藤雄二両先生，また資料を提供していただいた大鰐町観光企業課，青森県庁・市役所，米沢市役所，十和田湖町役場の各観光課の方々，さらにアンケートに協力していただいた大鰐温泉の方々に対して深く感謝の意を表します。

#### 【参考文献・資料】

- 山村順次・浅香幸雄(1976)：観光地理学 大明堂
- 山村順次(1986)：韓国釜谷温泉観光地の開発と地域の変化 新地理 34－3，12～21
- 青森県企画部(1984)：経済開発要覧 '84
- 青森県観光課(1985)：青森県観光統計概要
- 船水 清(1975)：わがふるさと 北方新社
- 大鰐町(1985)：大鰐町誌
- 大鰐町・大鰐町商工会・青森県経営指導課(1979)：大鰐町商店街診断報告書